

医史学と私

—地域における先哲顕彰事業とのかかわりにふれつつ—

江川 義雄

『廣島縣醫人傳』刊行にちなんで

平成元年十二月に私は『廣島縣醫人傳』の第二集を刊行した。前回の昭和五十九年に第一集を発行したものを加え、今回その一、二集を合本としたものである。

平成元年はちょうど、富士川游先生の五十年忌にあたる記念すべき年でもあるし、広島県の規模からすれば、広島県医学会の前身である芸備医学会第三代会長呉建先生の五十年忌にも当るのである。

因みに芸備医学会の初代会長は本会初代理事長でもあった呉秀三、第二代は永井潜である。その両先哲の靈前に拙著を供えることは私達後進の者にとって、まことにわずかではあるが、その学恩に報ゆる義務感でもあり、感謝の心情でもあった。

若き日の富士川游が医史へ傾斜した理由の一つには、郷里を同じくする先人、吉田憲徳（天保八年歿）の国史医言鈔を読み、開眼されたと記されている。しかしながら、それより以前に、紀州より安芸藩に移封された浅野長晟に召抱えられた碩儒・黒川道祐が芸陽国郡志を記述し、その記述内容が不備、粗雑ではあっても医史としての体裁を保ち、その学問的な歴史的基盤は潜在していたし、そのような文化的風土の中から、游の父、雪の^{すく}薰陶、師友の感化、本人の努力により、

独自の世界を開拓し、そのライフワークの集成は日本医史会のパイオニアであり代表する人物となった。

その膨大なる当地方に関する著述も、当然のことながら、きわめて多く、取り上げられた人物・事項についてはほとんど追補を要しないほどの完璧ぶりである。しかし、游歿後の記録はこれからということになる。それらが私達に課せられた責務であり宿題でもあり、そのような観点から著述の内容は不備・未完成ではあるが、小著に甘んじ、少量づつでも刊行計画をたてた。

秀れた医人を全国的立場から、学問的観点で、医家人名辞典を編纂することができれば、私達が未だ知らない医聖・医哲・医傑が発掘、紹介されるであろう。

幸なことに当地方については、医人伝刊行作業のサンプルはすでに富士川游、呉秀三以来先人の努力によって現存するので有難いことだと思っている。

学生時代の回顧からすると、旧制高校が高知高校の文科乙類ということ、知的関心は人文科学的に偏向し、サンスクリットを習ったり、参禅に加わったりしたが歴史に関しては特別に研究会に出席するとか勉強はしなかった。

岡山医大に進んで、はじめて医学史に開眼されたといつてよいであろう。

しかし岡大には医学史として独立した講座はなかった。富士川游の友人・京大教授藤波鑑の弟子であった病理学担当の田部浩先生は、医学哲学に熱心であり、とくに吉益東洞とその病理論とする万病一毒説の講義は極めて感動的であった。ただし、親しく教えていただいた専門の病理学については、日本住血吸虫症の講義が微かに記憶に止まっている程度である。青年期に受けた感動はその人の人生に決定的になった。私が大学卒業後二八年のことである。医学史の一端にふれた若き日の感動が現実として甦ったことは、自分自身として大きな驚きであり、新たな感激でもあった。

それは昭和四十八年に、吉益東洞歿後二百年を記念して、その顕彰事業を広島県医師会で行しようとするものであった。その時私はその担当常任理事として、衝にあたった。

式典には、全国からの医史会員も多数参列されたことは、今でも忘れ難く、有難い思い出となっている。

私自身のみでなく、田部浩先生の教えを受けた友も臨床科目選択時には、この話が方向を決定づけたという。

拙著『広島医人伝』を寄贈して、嬉しかった思い出は数々あるが、その中に医学部教授が講義の中へ、土生玄碩のエピソードを引用し、「人生は一生を通じて稽古だ」を学生達へ話すことにしているとの書評を受取った時、私の往年の経験を思い出し、受講した学生の夢と行動が結実されんことを祈ったものである。

顕彰事業とのかかわり

一度起ったことは二度、三度といわれるが、吉益東洞顕彰事業を契機に、昭和五十年に広島県安佐地区医師会、広島大学医学部、広島県医師会が主催となり富士川游顕彰事業が行われたことは、周知のことである。

富士川游らと共に日本医史学会の創設の恩人として、呉秀三の顕彰事業が呉市医師会、広島県医師会で、昭和五十四年に挙行された。これら三先哲に対する頌徳事業が昭和の晩年に次々と行われ、先人達の業績が不滅のものとして残るよう、夫々の記念事業が実施された。

顕彰碑建立として、吉益東洞に関しては広島医師会館前庭と、日本東洋医学会は広島市寺町報専坊にある。富士川游に関しては出生地、広島市安古市町長楽寺と今一つは広島大学医学部基礎棟に、撰文は夫々、佐藤美實、西丸和義により立派なものが建立されている。

頌徳事業として代表的なものに記念植樹も一般的である。富士川游事業の一つとして実施された山桃の木が東洞碑に寄り添うように、安佐地区医師会の手で植えられている。

第八七回日本医史学会広島開催と芸術医学会創立九〇年を記念して、会長であり広大耳鼻咽喉科原田康夫教授は、知人であるギリシア・アテネ大学教授の斡旋で、コス島からはるばるとヒポクラテスの木(すずかけの苗木)を送ってもらい、

Commemoration of Todo Yoshimasu

Published on 10 November 1973 in commemoration
of the bicentenary of Todo Yoshimasu

Hiroshima Prefectural Medical Association

Postscript

This brochure is published by the Hiroshima Prefectural Medical Association with the purpose of honoring, from the viewpoint of Japanese medical history, one of the few doctors of worldwide prominence.

DR. Yoshio Egawa, M.D.

広大医学部と医師会館庭に植樹した。それらは記念事業にふさわしく、青々として生長して、顕彰の精神を具象化させてくれ、その意義は大きいものがある。

記念誌の刊行は、また後世に残る貴重な資料である。吉益東洞顕彰の時は、この事業賛同の醸金者に、富士川游著『芸備医志』を復刻し、配布したし、行事式典当日には『吉益東洞顕彰記』とその英文版である“Commemoration of Todo Yoshimasu”を頒布した。これらは芸備医学会刊『東洞全集』とは違い、同者は二四頁、後者は一六頁のごく薄っぺらいパンフレットである。この英文抄録のような小冊子は意外な所で役立つことになった。

昭和五十一年、メキシコ市で第八回の国際産婦人科学会が開催され、その際、ついでにスペイン侵攻前のメキシコ医史を調べたいという希望を事務局長 Dr. C. McGregor に申入れをしておいたが、その要望を快く聞き入れてもらって、日系婦人の事務員をつけ、メキシコアカデミー総長 Dr. Silvestre Frank に会うよう手配してくださって、たいへん便宜を図ってもらった。総長はメキシコアカデミー沿革史を私にプレゼントされ、メキシコ流の壁画が飾られ、学会に貢献した多くの学者の胸像が立並ぶホールを案内されて説明があった。

別れる際に、総長から私は、この会場に来て何がもとも印象的であったかとの質問を受けた。

私は学会場となった Centro Medico National の入口の両脇に見上げるほどの大きいモニュメントが建立されている。その向って左に Hippocrates、右に Plato が会場広場を圧して来場者を迎えている。正に堂々たる景観である。

医学と哲学の合体調和の理想を掲げたこのシンボルはメキシコ医学の理念である事を知り、深い感銘を受けた、と返事を申し上げ、少々お粗末ではあったが、吉益東洞記念誌の英文版を総長に差し上げた次第である。日本語版であれば、内

容の理解はおそらく困難であったであろう。表題とあとがきはこのようになっていた。

これからは学問の世界も空間的にグローバルとなり、時間的には縮少がますます加速化されつつある。学問を通じてのコミュニケーションの手段は、表現の普遍性をもたないと理解されることは難しく、孤立し、やがてはとり残される運命にある。情報化文化社会にあっても、若き外人研究者は日本語を敬遠する傾向が強いし、学問には国境がないだけに、学術の世界は、その発表方法は欧文併用でないと、いかに邦文論文が秀れていても、真価は理解されず自己陶醉の感は免れない。世界的に高名な日本の医師達は、その研究発表歴をみれば、邦文発表もさることながら、欧文形式の発表を念頭に置いていることがわかる。

明治四十四年二月、富士川游は Dresden での万国衛生博覧会で *Kurze Geschichte der Medizin in Japan* と題して日本紹介をし、万丈の気を吐いている。去る昭和六十一年の弘前での学会で、Freiburg 大学の Edward Seidler は、本書を参考し、参考にしていと話していた。

富士川游顕彰の際に発行した記念誌としては『富士川游先生』が昭和二十九年に同刊行会から二四四頁ですでに刊行されていて、昭和五十年に富士川游顕彰会が頒布した『富士川游先生』は、前者をさらにパンフレット化させて、わずか一六頁の内容であった。昭和六十年十一月には、富士川游の地元である安佐地区医師会史には、その第二篇第三章第一〇節に、二九頁にわたり富士川游顕彰事業の項を設け事業の顛末・報告がなされている。

同顕彰会では、広島大学医学部との協議で、游の選集を記念出版しようとする計画があったが、すでにその構想は富士川英郎先生が前から温められていて、その具体化は今日私達が活用させて戴いている「富士川游著述集」十巻が思文閣から昭和五十七年に刊行されたのである。

呉秀三顕彰に関しての記念誌は、昭和五十六年広島県医師会から発行され、野間祐輔氏編集で一三三頁の内容からなり、秀三に関して多面的な展望が試みられている。

以上のように記念誌の発行のみならず、顕彰事業の企画・進行があれば、その度毎に部内的には医師会速報で反復情報提供があり、関心の薄い医師達にも啓蒙効果を与えてきた。

胸像・ブロンズ像・肖像などの作製について

吉益東洞顕彰時では、高さ二十六厘のブロンズ像が再作製され、これは医師会館講堂入口、応接室を飾り、また希望者に頒布された。呉秀三のブロンズ胸像は、医学文化館所蔵のものが複製され、昭和五十四年十一月十一日にその除幕式を挙行した。ロビーの展示コーナーに秀三関係の資料も収められ、来館者の注目をあびている。

吉益東洞、富士川游、呉秀三の三先哲像は、すでに医師会館会議室に掲げられているところであるが、本年の秋には、新たに永井潜と呉建の二名のそれが追加され、壁面を飾ることになっている。

私と医学史とのかわりは、広島地区の顕彰活動紹介となり、最近の動向を報告することになってしまった。ご諒解を願いたい。

(広島県廿日市市)